

## 1 剰余の定理

$P(a)$ を $a$ に関する多項式とする

$$P(a) = (a - k)Q(a) + R \quad (P(a)を(a - k)で割る)$$

ここで、 $a = k$ を代入すると

$$P(k) = (k - k)Q(k) + R$$

$$P(k) = R$$

$$\text{よって } P(a) = (a - k)Q(a) + P(k)$$

$$\text{つまり } P(k) = 0 \Leftrightarrow P(a)を(a - k)で割り切れる。$$

具体例

$P(a) = a^n - b^n$  とすると、 $P(b) = b^n - b^n = 0$  なので、 $(a - b)$ は $a^n - b^n$ を割り切れる

実際に、 $a^n - b^n = (a - b)(\sum_{k=0}^{n-1} a^{n-1-k} b^k)$

$n = 3$ のとき、 $a^3 - b^3 = (a - b)(a^2 + ab + b^2)$

## 2 $-1 \times -1 = 1$ の証明

$$-1 + 1 = 0 \quad (\text{マイナスの定義 } -a + a = 0)$$

$$-1 \times (-1 + 1) = -1 \times 0 \quad (-1をかける)$$

$$(-1) \times (-1) + (-1) \times 1 = 0 \quad (\text{分配法則と、} a \times 0 = 0)$$

$$(-1) \times (-1) + (-1) = 0 \quad (a \times 1 = a)$$

$$(-1) \times (-1) = 1 \quad (\text{両辺に1を足す})$$

### 3 統計

#### 3.1 相関係数 (correlation coefficient)

**分散**  $n$ 個の資料 $x_1, x_2, \dots, x_n$ の分散 $\sigma_x^2$ は

$$\sigma_x^2 = \frac{1}{n} \sum (x_i - \bar{x})^2$$

と定義する。偏差の2乗和。

**共分散** 2変量 $(x, y)$ をもつ $n$ 個の資料 $(x_1, y_1), (x_2, y_2), \dots, (x_n, y_n)$ における共分散 $\sigma_{xy}$ は

$$\sigma_{xy} = \frac{1}{n} \sum (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})$$

(ただし、 $\bar{x} = \frac{1}{n} \sum x_i, \bar{y} = \frac{1}{n} \sum y_i$ )

と定義する。 $x$ の偏差と $y$ の偏差の積の平均。

**相関係数の定義** 2変量 $(x, y)$ を持つ $n$ 個の資料を $(x_1, y_1), (x_2, y_2), \dots, (x_n, y_n)$ とする。このとき、相関係数 $r$ は

$$r = \frac{\sigma_{xy}}{\sigma_x \sigma_y}$$

と定義される。 $x$ と $y$ の共分散を標準偏差の積で割る。

また、分子の $n$ と $x$ と $y$ の標準偏差をかけることで生まれる $n$ が打ち消しあうので以下の定義も可能

$$\begin{aligned} r &= \frac{\frac{1}{n} \sum (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\frac{1}{n} \sum (x_i - \bar{x})^2} \sqrt{\frac{1}{n} \sum (y_i - \bar{y})^2}} \\ &= \frac{\sum (x_i - \bar{x})(y_i - \bar{y})}{\sqrt{\sum (x_i - \bar{x})^2} \sqrt{\sum (y_i - \bar{y})^2}} \end{aligned}$$

**相関係数の絶対値が1以下の理由**